

森や川、海が連携して生み出す自然環境への影響を科学的に調べる「森里海連環学」と名づけられた学問分野が発足した。テーマの広がりに応じて旧来の大学の講座の壁を取り払い、人材を養成して研究にあたるというこれまでにはない本格的な取り組みだ。

森と海の効用が見直され、里山の保全が進められるなど時代の要請にも呼応している。新分野の研究は、昨年設立された京都大学フイールド科学教育研究センターを拠点に展開される。森や海の豊かな恵みの波及効果が客観的な分析データで裏付けられ、解き明かされることを期待したい。

森が海の生態系に重要な影響を与えることは生活者の経験から先人の知恵としてわかっている。ところが、驚いたことに、この森や海の境界領域が果たす役割については大学の研究者個別の研究はあっても、大がかりな研究プロジェクトはほとんどなく、全体像がわかっていない。

実は、この分野の発足は、国立大学の資産を有効活用するために施設を創設したのがきっかけだった。国立大学は、生物学や農学の研究用の広大な実験施設を全国各地に持っている。しかし、数年前から「もっと活用すべきだ」「水圏など地域全体の生態系をテーマにした研究が時代の要請」との声があり、文部科学省で検討していた。この結果、北海

論説委員

坂口至徳

一筆多論

森と海の関係を究明へ

道など実験場を持つ大学にそれぞれ一括管理するフイールド科学センターを設けた。京都大学の場合、理学部の瀬戸臨海実験所(和歌山県)や、農学部の演習林(京都府、和歌山県、北海道、山口県)などが統合した。

「森」と「海」の研究者が日常的に共通の実験場で研究できることの意義は予想以上に大きい。旧来の大学の講座は、専門領域の教育や研究の方法が講座独自で築き上げられ、講座の壁を越えて大規模な研究に参画することや、データの共有は難しかった。専門領域の研究は深まるが、他の領域に広がりにくい「森を見て地球を見ず」の状態だった。

田中克・京大フイールド科学教育研究センター長は「各分野に分断されていた地球環境の研究が、総合的な視野で果たせ、人材の養成もできます」と期待する。当面のプロジェクトとして、全国の演習林などを拠点に、北海道、九州、日本海側、太平洋側の四地域での生態系の研究調査を行う。

こうした研究のベースになる先駆的な仕事は、地元の漁業者らがすでに行っていた。その一人が「森は海の恋人」運動で知られる宮

城県の牡蠣養殖業者、畠山重篤さん(牡蠣の森を慕う会代表)。畠山さんは、牡蠣が不漁になったさい、森の広葉樹と関係があるのでないか、と悟った。約十五年前から植林を進め、成果を上げた。この運動は全国に広がっている。畠山さんは「海岸の魚つき保安林などで漁場と樹木が関係していることは経験から知っていましたが、海岸から離れた森まで影響していたんですね。海に河川の水が流れ込む汽水域などこれから研究してほしい場所がたくさんあります」と話す。

このような森と海の間を繋げる可能性がある研究では、松永勝彦・北海道大名誉教授が「森から海に流れ込む鉄分が魚の餌の植物プランクトンを育てる」と発表している。松永名誉教授は「専門は化学でしたが、生物学という境界領域に踏み込みました。専門にとらわれない研究者はこれから増えていくべきです」と力説した。

温暖化防止に役立つ二酸化炭素の吸収などパワーを秘めながら、環境のなかで繊細な連携を保つ森と海の研究こそ各分野を結集した体系的な視野で進めなければならない。